

『上清大洞眞經』の構成について

垣 内 智 之

序言 問題の所在

若し『大洞眞經』を得れば、復た金丹の道を須たざるなり。之を読むこと萬過、畢らば、便ち仙たるなり。
(『眞誥』卷五、一一b五)

『大洞眞經』を一萬回讀誦すれば昇仙できるとする
『眞誥』の言葉は、仙薬の服用に代わる新たな昇仙法を明確に提示したものととしてよく知られている。同じく『眞誥』に、『大洞眞經』を「仙道の至經」(同、一五a四)と評價する言葉が見られるのも周知のことであろう。

『上清大洞眞經』の構成について

そして、これら『眞誥』の言葉が、『大洞眞經』こそ上清經の頂點に位置する重要な經典だという認識を定着させる大きな要因になったと言ってよいのだが、讀誦すれば昇仙できるという『大洞眞經』がどのような内容をもっていたかについては、實は、よく分かっていない。該經の構成や内容に言及するものは、決して多くないのである。

按ずるに、『登眞隱訣』第二「經傳條例」に云ふ、『大洞眞經』は、今、世中に兩本有り。一は則ち大卷にして、前に「回風混合之道」有りて、辭旨の假

『上清大洞眞經』の構成について

附、多くは是れ浮偽なり。一本は唯だ三十九章有り。其の中に乃ち數語の右英の説く所と同じき有れども、互ひに相ひ混糅して、分別すべからず。(中略)又た『玉注』一卷有り。

(宋・陳景元『上清大洞眞經玉訣音義』二二a四)

この『登眞隱訣』の文章は、道藏所收の現行本には見られない佚文である。⁽²⁾これによれば、陶弘景の頃の『大洞眞經』には、三十九章のみから成るものと、「徧風混合の道」を含むものがあつたという。

なるほど道藏には、『上清大洞眞經』と題する經典が収録されており、その卷末には「徧風混合帝一祕訣」と題する一章が置かれている。しかし、だからと言ってこれが右文に言う「大卷」の系統を引くものだと推定するのは安易に過ぎよう。道藏本『上清大洞眞經』の構成の複雑さは、それが明らかに複數の要素から成り立っていることを示しており、假に六朝期に讀誦されていた内容がそこに含まれているとしても、それは相當程度に及ぶ

であろう後世の附加部分を削ぎ落とさねば見えてこないはずなのである。

そこで本稿では、『上清大洞眞經』を分析して、該經がどのような要素から構成されているかを明らかにするとともに、讀誦されていた内容の痕跡をそこに認め得るか否かを確認してみたい。

一 傳統の誇示

『上清大洞眞經』の卷頭には、「茅山上清二十三代宗師觀妙先生朱自英述」とされる序文が置かれる。また、全六卷すべてに「茅山上清三十八代宗師蔣宗瑛校勘」と記されており、さらに卷末に置かれる二篇の後序のうちの一方は、「正一嗣教道合無爲闡祖光範真人領道教事四十三代天師張宇初謹書」とされるものである。

そして、程公端という人物の手に成るもう一篇の後序には、次のような言葉が見られる。

茅山の上清宗壇にて、歷代傳授すること千餘歳の間、

纔かに三十八人。(『上清大洞真經』卷六、一九a四)

三十八人という數は、校勘を行なった蔣宗瑛を念頭に置いたものと見られる。蔣宗瑛の生卒年は詳らかでないものの、『茅山志』卷十二に、至元十八年(二二八一)に世祖から詔を受けたという記録がある。その活動時期は、魏華存が靈媒楊羲を介して許氏のもとに降臨した興寧二年(三六四)から數えてもさすがに千年を超えることはないが、歴代の宗師の間で長期にわたって傳授されてきたとするこの言葉には、經典の正統性を認めさせたいという氣持が表われている。

しかし、同じく長い傳統を誇るかのように巻頭に置かれる序文は實に奇妙な文章であって、傳統を受け繼ぐ立場にあった人物が書いたものにしては、あまりにお粗末な代物だと言わざるを得ない。

この序は、既に指摘があるとおり、全體の三分の二ほどが、道藏本で言えば、『洞真高上玉帝大洞雌一玉檢五老寶經』と『洞真太上素靈洞元大有妙經』からの引用を

つなぎ合わせた文章となっている。⁽⁴⁾序に他經の内容を引くこと自體は珍しくないかも知れないが、その引用が慎重に行なわれたものでないため、地の文との齟齬がいくつか見られるのである。

例えば、序の後半で『大有妙經』から經典の傳授に關する記述を引いているにも關わらず、文末で再び經典の傳授に言及しており、その兩方(三a五、三b六)で、『九真明科』に依據すべきことを述べているのは、明らかに調整不足であろう。また、次のような例もある。

夫れ道に三奇有り。第一の奇は『大洞真經三十九章』、第二の奇は『五老雌一寶經』、第三の奇は『素靈大有妙經』。(一b八)

『大洞真經』を筆頭とする三つの經典が上清經の最上位に位置することを主張するものとしてよく知られるこの文も『大有妙經』からの引用だが、この前には、實は、趣旨の異なる次のような一文が置かれているのである。

『上清大洞真經』の構成について

一一一

又た『徊風帝一』、『高元雄一』、『五老雌一』有り。
是の三經は、三十九章の尊經を輔くる所以なり。
(一b六)

『高元雄一』という呼稱は、道藏中に他例を見ないため、それが何を指すか明らかではなく、したがって文意も明確ではないが、「徊風混合帝一祕訣」を卷末に置く『上清大洞真經』の序文において、それをあたかも單行の經であるかのように言い、「三十九章の尊經」すなわち『大洞真經』を支える存在だとする點には不自然さを感ずる。さらには、次のような例もある。

故に上清三十九帝皇は眞を迴して下に映じ、兆の身中の三十九戸に入る。是に於いて各おの其の貫く所の戸に由りて、一章を著す。(中略)中央黄老元素道君、彼の列聖の奥旨を總べて、大洞の眞經を集成す。(一b一)

此の經の作こるや、乃ち玄微十方の元始天王の運らす所の炁自ら撰集するなり。(中略)元始天王、又た以て上清八眞中央黄老君に傳へて、下方の當に眞人と爲り、三三辰に上昇すべき者に傳へしむ。(二a二)

右のうち、後者は『五老寶經』からの引用文であり、一部が『無上祕要』卷三十にほぼ同文で引かれている。『無上祕要』がその出典を『大洞真經三十九章』と表示している點には疑問が残るものの、古くから言われてきた説であることが確認される。一方、前者は三十九位の神々が一章ずつ經を著し、それらを中央黄老元素道君がまとめたと言くものであって、三十九の章が成立した理由としてはよくできた話に見えるが、そもそも「上清三十九帝皇」という呼稱自體が他の文献に見えないものであって、基づくところが定かではない。そして何より、同じ序文のなかで全く整合性のない二つの説を提示しておきながら、周圍には、兩者に整合性をもたせようとする言及が全く見られない點は理解に苦しむ。

古來の『大洞眞經』を脈々と受け継ぐ傳統が實際に存在していたとするならば、その傳統を受け継いだ者が序文に不自然な記述を並べ、經典成立の経緯という、經典の權威にも關わりつけ重要な事柄を述べるにあたって、明らかに矛盾する説を漫然と併記するであろうか。

二十三代宗師朱自英によるとされる序文がこうした内容であるという事實、そして傳承のもう一人の當事者である蔣宗瑛が全編にわたって校勘したとされる一方で、この序文が溫存されているという事實は、程公端の後序に言うような千年の傳統など、そもそも存在していなかったことを暗に示していると言えるだろう。

二一 〈道經〉と〈章〉

『上清大洞眞經』卷一は、「誦經玉訣」と題する一文から始まり、「誦經入室存思の圖」「開經玄蘊呪」など、經典を讀誦する前の儀式に關する文や圖が並んでいる。當然、これらは『大洞眞經』を讀誦する前に行なうべき儀式を示すものとしてそこに置かれたのであろうが、大半

は他の經典の記述を引用してつなぎ合わせたものであって、『大洞眞經』専用に一から考案されたものではない。一部には、『大洞眞經』の成立を考えるうえで重要な部分も含まれているが、本稿では、差し当たり卷一を分析対象から外しておく。⁽⁵⁾

卷二以降は「高上虛皇君道經第一」(圖1①)、以下、圖表は四〇頁以降を参照から「九靈眞仙母青金丹皇君道經第三十九」まで、神の名前を冠する〈道經〉が三十九並ぶ形で構成される。それぞれの〈道經〉は、ある一時期にまとめて記述されたものではないらしく、明らかに複數の要素から成り立っている。本稿では分析の便宜のために、圖1に示したとおり、「高上虛皇君道經第一」を假に①から⑫に分割して検討を加える。

まず、〈道經〉の名稱①に續いて置かれる、「太微小童章」(①②③)は、太微小童に對して、死をもたらず死氣の入口を塞ぐように祈る言葉から始まる。

謹しみて太微小童、干景精、字、會元子に請ふ。常

『上清大洞眞經』の構成について

に兆の舌本の下、死炁の門を守れ。(巻一、一a五)

その後、太微小童の吐き出す氣が修行者の身體を包み込み、修行者の血液となって泥丸に集まる様子を存思することなどが説かれる。

これまで、他の上清經において體内神の存思が重要な位置を占めるのと同様、『大洞眞經』においても〈章〉の部分に説かれる體内神の存思が修行法の中核を爲すと考えられてきた。^⑥しかし、高上虚皇君と太微小童との關係をはじめとして、〈道經〉の名に冠される神と〈章〉で祈りの対象とする神の關係について『上清大洞眞經』は何も語っておらず、それぞれの〈道經〉の冒頭に〈章〉が置かれた理由は不明と言うほかない。後述するとおり、一つの〈章〉で複数の神に祈る場合があるため、〈章〉に名に見える神は〈道經〉の数よりはるかに多い六十位を数え、〈道經〉の神と一對一の對應關係にないことも不自然さを感じさせる。圖1で言えば、①の直後に①から始まる太微小童に関する一連の記述を置く必然

性は、全く感じられないのである。

このことを裏附けるように、『大洞眞經』に、元々は〈章〉の部分が含まれていなかったことをうかがわせる敦煌文書が存在する。英國・舊インド省圖書館が所蔵するもので、大淵忍爾氏が『大洞眞經』の一部である可能性を指摘されたものである。^⑦この寫本を見ると、「高上虚皇君道經第一」という名を提示するところは圖1①と同じだが、その直後に「大洞玉經曰」という言葉があり、圖1①②に相當する内容が、③の最後の一句「俱入帝堂會」を除いてそこに見える。寫本は下部を四字分ほど缺損しているらしいが、文字が確認できるところについては、大淵氏も指摘するとおり、道藏本とほとんど異同は無い。したがって、この敦煌寫本が書かれた時期には、〈道經〉に〈章〉の部分を含まない構成のものが存在したことが確認できるのである。その當時にこれが『大洞眞經』と呼ばれる文獻であったか否かは確かめられないが、〈章〉の部分が、本来の構成要素ではない可能性を強く示していると言ってよいだろう。

なお、圖1①の符は「大洞太微小童消魔王符」という名であって、明らかに太微小童に關連しており、①に記された符の書き方と用い方には①～③と通じ合う内容が見られる。したがって、〈道經〉に①～③の部分が含まれていなかった當時には、①②の部分も含まれていなかったと考えられる。

むろんわずか一點の敦煌寫本のみによって斷定するとは控えるべきだが、そもそも一つの〈道經〉に一つの〈章〉という構成に必然性がなく、〈道經〉と〈章〉の神々相互の關係が明確でないという事實は、これらが別個に考え出されたものであることをうかがわせている。しかも、拙稿で指摘したとおり、〈章〉に名が見える神々は、他の複數の上清經に説かれる神々が、それぞれのまとまりのまま、寄せ集めのように竝んでおり、これらの神々を列擧すること自體、その説が、明らかに他の上清經よりも後れて成立したことを示している。したがって、〈章〉に當たる部分を含まないテキストが存在したとしても、何ら不自然ではないのである。

三 〈道經〉の神

では、〈道經〉に冠される神々の名は、どこから導かれたのであろうか(三十九位の神號は表1A參照)。またまったものとしては、『五老寶經』に『上清大洞眞經』とほぼ同じ神號が見られるが、これはすでに三十九位の神々がまとまった後の姿であって、それを『九天太眞道德經』のものとして挙げている點は注目されるもの、成立に關する情報は得られない。また、神號を題に冠する例としては、表1B『洞眞上清神州七轉七變舞天經』の〈道章〉の呼稱にもAと共通點が見られるが、一致する數が限定的で配列順にも相違が見られるため、『上清大洞眞經』がこれに基づいたと考えるに無理がある。¹⁰一方、神號とその配列順において、より多くの共通點をもつ例を『無上祕要』に見いだすことができる。

明眞宮 靈暉府

右は太初九素金華景元君の居所。

〔無上祕要〕卷二十一、三a八

『無上祕要』「三界宮府品」では、天界の宮殿の呼稱などを列挙するなかで、右のように宮と府の呼稱を挙げ、そこに居ます神の名を示しているところがある。一連の記述を辿っていくと、そこに示される神々のうち十八位の神が、表1Cに示したとおり、『上清大洞眞經』の「道經第二十二」から「道經第三十九」に冠される神々の名と、字句の異同こそあれ、神格としては悉く一致している。ただ、その一方で、宮や府に關する記述は『上清大洞眞經』には見えないから、これらの情報源は、明らかに別に存在していたはずなのである。

その出典に關しては、『無上祕要』が『洞眞經』及び『道迹經』『眞迹經』に出づ」という曖昧な記録を十一葉ほど離れたところに示すのみであるから、情報源を特定するのは困難だが、道藏中でこれらの記述に對應する内容をもつものに『上清元始變化寶眞上經九靈太妙龜山玄籙』^[1]がある。表1Dとして示したとおり、該經の卷下に

名の見える神々のうち、十五番目から三十二番目の神が、『無上祕要』のものとは一致するだけでなく、神々の居處に關する記述も基本的な一致を見るのである。

太初九素金華景元君、元は皇靈の氣、形長九千萬丈。
 (中略)金華景元君の道を修行するに、當に冬至の日及び太歳の日を以て室に入るべし。東北に向かひて九拜し、景元君に朝す。畢らば、還た北に向かひて叩齒すること三通。景元君の四時に隨ふ形影の、上清明眞宮、靈暉府、天權郷、遊樂里に在り、眞を廻し下に映じ、兆の頭面の境に入るを思へ。

〔龜山玄籙〕卷下、一九a一

右に示したとおり、その神が元々どのような氣であったかを述べたうえで、中略部分においては、その神が季節ごとに姿を變えることを述べる。そして、特定の日に、神が天界から修行者の身體に下降してくる様子を存思することを述べるのが、『龜山玄籙』の記述の基本的な流

れである。『龜山玄籙』では、卷上と卷下において、七十四位の神々について同様の記述が繰り返されるが、このうち、『無上祕要』卷二十二と一致するもののほか、卷下の十三番目、十四番目も、それぞれ『上清大洞眞經』の「道經第二十」「道經第二十一」と一致する(表1A・D)。さらには、表2に示したとおり、順序こそ異なるものの、卷上にも『上清大洞眞經』の「道經」の神々と對應するものが見られ、卷下の例と合わせれば、三十九位すべてについて對應する神號が見られる。しかも、右に引いた『龜山玄籙』の文章と同様の記述は、『無上祕要』にも見いだすことができるのである。

西華高上虛皇君、元は上皇の氣、諱字、形長六千萬丈。(中略)西華の道を修行するに、當に立秋の日を以て室に入るべし。西に向かひて六拜し、虛皇君に朝す。還た北に向かひて叩齒すること九通。虛皇君の四時に隨ふ形景の、玉清音光宮、八垣府、西明郷、極微里の中に在り、眞を廻し下に映じ、兆の腓

の後門に入るを思へ。

(『無上祕要』卷九十七、一七a4)

『無上祕要』には、『元始變化實眞上經』を出典とする右例のほか、卷九十三にも『洞眞元始變化上經』を出典とする類似の記述がある。出典とされる兩經の名稱に共通する「元始」「變化」「上經」の六字が、『上清元始變化實眞上經九靈太妙龜山玄籙』にも含まれていることから、これら兩經は現行の『龜山玄籙』に繋がるものである可能性が高い。上中下三卷から成る現行本『龜山玄籙』は、卷上と卷下は記述が同系統である一方、卷中は記述形式が全く異なるという奇妙な構成になっており、その成立および構成については精査を要するが、七十四位の神々に關する記述に限るならば、『無上祕要』が編まれた段階で、現行本『龜山玄籙』に見えるような記述がすべて揃っていたと考えてよいだろう。

『上清大洞真經』の構成について

二八

四 〈章〉の神

前節で見たとおり、『龜山玄籙』は、神々が修行者の身體に降ってくる様子を存思することを説く。そこで、神が降り立つ部位に注目してみると、表3に示したごとく、『上清大洞真經』において、太微小童をはじめとする神々にそこを守護してくれることを願う死氣の入口とほぼ一致している。例えば、『上清大洞真經』では、太微小童に對して「舌本の下」「血液の府」を守ってくれるように祈ることを説くのに對して(表3A)、『龜山玄籙』は、高上虛皇君が「上元血液の府」に降下してくれる様子を存思することを説くのである(表3B)。

つまり、『上清大洞真經』單體で見える限りにおいては關係が明らかでなかった高上虛皇君と太微小童が、『龜山玄籙』を介して見れば、「血液の府」という部位を接点にして關連を有していることが知られるのである。

しかし一方で、太微小童をはじめ、『上清大洞真經』の〈章〉に名が見える神々に關する記述は、『龜山玄籙』

には一切見られない。そこで『無上祕要』に目を轉じてみると、卷九十七に收める「迴神飛霄登空招五星上法」に、『上清大洞真經』に類似する記述を見いだすことができる。

又た思ふらく、肝中四眞、名は清明君、字は明輪童子、恒に我が肝中を填め、我が胃管の戸、膏膜の下を守り、死氣を固塞し、我が爲に青精青水玉芝を降す。因りて歳星の精光を存し、口もて引きて之を嚙むこと九十過にして止む。

〔無上祕要〕卷九十七、一b三

謹みて肝中四眞清明君、字、明輪童子に請ふ。常に兆の胃腕の戸、膏膜の下、死炁の門を守れ。

〔上清大洞真經〕卷三、一九a五

兩者の記述はよく似ており、別個に成立した説でないことは明らかである。つまり、『上清大洞真經』は、〈道

經』の神については『龜山玄籙』と共通点を有する一方(表1A・Dおよび表2)、〈章〉の神については「招五星上法」と共通点を有しているのである(表4)。したがって、最大の問題は、『上清大洞真經』のような構成のものがまず存在し、そこから二系統に分かれたのか、もしくは、〈道經〉の神と〈章〉の神とは別々に考え出されたものであって、兩者を結び附けた姿を示すのが『上清大洞真經』なのかという点になるだろう。

既に指摘したとおり、〈章〉の部分を含まない形式の敦煌文書が存在することから、〈章〉の部分は後から附け加えられた可能性が高い。しかも「招五星上法」と『上清大洞真經』とを比較すると、次に示すとおり、「招五星上法」の方がより古い形を留めている可能性が高く、こちらが『上清大洞真經』の情報源となった考えるのが妥当である。

『上清大洞真經』第十八章の神と、「招五星上法」の八番目の神は、ともに堅玉君であるが(表4)、「招五星上法」においてはその神が「骨節二眞」と呼ばれるのに對

『上清大洞真經』の構成について

して(表4B)、『上清大洞真經』では「胃腕二眞」と呼ばれている(表3)。この堅玉君は、いかにも堅そうな名が物語るとおり、本来、骨に宿るとされる神である⁽¹³⁾。敦煌文書ベリオ二七五一には次のようにある。

第二眞法。辰時に、大神は形を分かちて盡く骨中に在り。號して堅玉君と曰ふ。辰時に、手を兩膝上に接し、炁を閉ざし、冥目し、内に堅玉君の入りて一身の諸百骨中に坐すを視る。

骨の神であった堅玉君が胃と結び附けられた経緯はかつて論じたことがあるため詳細はそちらに譲るが、堅玉君を胃の神とする『上清大洞真經』の説は、それを骨の神とする「招五星上法」よりも明らかに後れて成立したものである。したがって、『上清大洞真經』のような構成のものが先に存在した可能性は否定される。

そもそも『上清大洞真經』では、一つの〈章〉に複数の神の名が見える例があり、第三十七章に至っては、神

に守ってもらう部位も複数にわたるといふ不自然な構成になっていることも(表3 A・4 A)、まず「三十九」という數値ありきで構成し始めた後に、「招五星上法」に見られる要素をその枠組みに無理矢理ねじ込んだことを示しているだろう。一方の〈道經〉の神については、現行本『龜山玄籙』の元となった文獻と『上清大洞眞經』のいずれが情報源となったかを判定する材料は十分とは言えない。ただ、〈道經〉の神は〈章〉の神よりも先にその枠組みが出来上がっていた可能性が高いにも関わらず、『無上祕要』がそれを『大洞眞經』とは異なる文獻から引用していることは、『無上祕要』の編者の手元には『上清大洞眞經』のような構成の『大洞眞經』が存在していなかったことを物語っているとと言えるだろう。

五 〈道經〉と〈章〉の結合

『龜山玄籙』において、神が修行者の身體に降ってきた際に宿る部位と、「招五星上法」において神に守ってもらう部位が共通しているのは、一方の説が成立した後、

同じ部位に全く別の神々を割り當てることによって、もう一方の説が成立したことによると考えられる。そして、そうすることによって生じた共通点を鍵として全く異なる神々の體系を結び付け、一つの〈道經〉の中に一つの〈章〉を置く構成を作りあげたのが『上清大洞眞經』だと言える。

ただ、既に指摘したとおり、『上清大洞眞經』においては〈道經〉と〈章〉の關係についての言及は見られない。ところが、両者を明確に結び付けて述べる文獻が存在する。『上清太上玉清隱書滅魔神慧高玄眞經』がそれである(圖2)。

「高上虛皇君道經」を讀むに、當に太微小童、干景精を思ふべし。眞の炁は赤色煥煥たりて、兆の泥丸中従り入り、下りて兆の身、舌本の下、血液の府に布く。(『上清太上玉清隱書滅魔神慧高玄眞經』八b二)

右のとおり、『高玄眞經』では、まず、〈道經〉を讀む

前に太微小童の存思を行なう必要があるとしたうえで、太微小童の氣が「舌本の下、血液の府」に到達する様子を存思することを説く(圖2①)。その後、二つの祝文(圖2②④⑤)を唱えることを説くのだが、これらの祝文は『上清大洞眞經』に同じ順序で並んでおり(圖1㉔㉕㉖)、圖2の②と④の祝文の間に位置する③「赤炁を引くこと三嚙にして止み、便ち經を讀む」という言葉が見られるところには、『上清大洞眞經』では『大洞玉經』の韻文が置かれている(圖1㉑)。

『高玄眞經』では、同様の記述が第八葉から第三十六葉にかけて續いており、圖2①と同様に、三十九すべての〈道經〉について、それを讀む前に存思すべき神の名が明らかにされていく。これらは、『上清大洞眞經』に當てはめれば、〈道經〉と〈章〉とが關連していること明らかにする言葉に見えるが、後發の説は先發の説よりも複雑さを増すという所謂〈加上説〉に従って讀むならば、太微小童の存思という修行法を、それとは別個に成立していた「高上虚皇君道經」に、意圖的に關連付けよ

うとする言葉だということになる。『高玄眞經』は、三十九の〈道經〉に對するこれらの記述の後に、『無上祕要』からの引用であることを明記して文章を引いているから、〈道經〉と〈章〉とを結び付けようとするこれら一連の記述は、『無上祕要』成立後に書かれた可能性が高いのである。⁽¹⁶⁾

『高玄眞經』の記述の流れを見ると、圖2③のところで「經」、すなわち『高上虚皇君道經』を讀むことが最も重要であつて、その前後で祝文を唱えるのも、太微小童を存思するのも、經典の讀誦に附隨する手順に過ぎないと言える。これを『上清大洞眞經』に當てはめると、『大洞玉經』と題する韻文を讀むところが最も大切な箇所だということになる。したがつて、素直に考えれば、これこそが讀誦すべき經の本體、『大洞眞經』の中核だということになるのだが、『大洞玉經』と題する韻文には、先に擧げた堅玉君をはじめとして、〈章〉に名に見える神々に關する言及が少なからずあり、こうした内容をもつものが、まず最初に成立していたとは考え難い。

『上清大洞眞經』の構成について

三二一

むしろ、元々は存在していなかったところに後から組み入れたか、元のものとするり替えることによってそこに置かれた可能性が高いと考えるのが自然であろう。本稿では、『大洞玉經』の部分が原初の『大洞眞經』の姿を傳えているか否かの判断は留保しておく。

六 『無上祕要』以前の『大洞眞經』

宋の陳景元が『上清大洞眞經玉訣音義』において注の對象とした語句を辿っていくと、『上清大洞眞經』のうち、卷一の一部と、卷末の「徧風混合帝一祕訣」を除いて、ほぼ全編にわたっており、陳景元の時代には、現行本に近い姿の『上清大洞眞經』が存在したと推定される。したがって、陳景元の活動時期が該經成立の下限ということになる。¹⁷⁾

一方、その上限を定めるのは資料的な制約があつて極めて困難であると言わざるを得ない。『雲笈七籤』卷八には、『上清大洞眞經』に見られる事項について解釋した「釋三十九章經」が収録されており、これを六朝成立

と見る論考も發表されている。¹⁸⁾ もし、「釋三十九章經」が六朝のものであれば、『上清大洞眞經』は、それ以前に成立していたことになるが、そう考えるのには無理がある。

高上の洞經を讀むこと既に畢らば、乃ち口づから祝して曰はく、「三藍羅、波速臺」。此れ九天の祝言、高上の内名なり。
〔雲笈七籤〕卷八、二一六)

「三藍羅、波速臺」は、『上清大洞眞經』では「天上内音」と呼ばれており、それに對應する「地上外音」と併記されている(圖1①)。「釋三十九章經」では、右に示したとおり、これを「高上の内名」、すなわち高上虚皇君の祕密の名だと解釋しているが、こうした設定は不自然だと言わざるを得ない。既に確認したとおり、「道經」の神は、『龜山玄籙』の元となった文献をその情報源としているが、そこでは神の諱と字に觸れることはあつても、内名には言及していなかったはずなのである。

高上虚皇君、元は上皇の氣、諱は幽造、字は大法朗、
形長七千萬丈。〔龜山玄籙』卷上、一三a一〕

しかも『龜山玄籙』卷上では右のように諱と字が文字で明示される一方、『無上祕要』卷九十七所引『元始變化眞上經』では、それらが文字では示されず、これに對應する『龜山玄籙』卷下に至っては諱字に關する記述すら見られない。¹⁹⁾ こうしたことから、「道經」の神の諱字は、もともと口傳によつて傳えられるという設定であつたものが、後に文字で示されるようになったと推測される。

したがつて、假に「内名」が諱や字よりも祕匿性の高いものであつて、『龜山玄籙』およびその元となつた文獻の段階では明らかにされていなかったのだとした場合、それを『上清大洞眞經』や「釋三十九章經」のようにはつきりと文字に示すようになるのは、諱や字が文字で示されるようになった時期よりもさらに後のことと判断される。²⁰⁾ つまり、「天上内音」が當初から構想されていた

か否かに關わらず、それを文字で明確に示している「釋三十九章經」の成立を『無上祕要』以前に設定することはできないのである。

もつとも、『上清大洞眞經』に含まれる内容が、六朝時代に『大洞眞經』のものとして扱われていた例が全く無いわけではない。『眞誥』卷九に『大洞眞經中篇』を出典とする韻文が見られるが、これは『上清大洞眞經』の「玉清太和王祝」と題する祝文と基本的に一致するものである。²¹⁾

『眞誥』卷九

〔高上玉帝君道經第三〕

玉清太和王祝曰、

扶晨始暉生、紫雲映玄阿。	扶晨始暉生、紫雲映玄阿。
煥洞圓光蔚、晃朗濯耀羅。	煥洞圓光蔚、晃朗濯耀羅。
眇眇靈景元、森灑空清華。	眇眇靈景元、森灑空清華。
九天館玉賓、金房煙霄歌。	九天館玉賓、金房唱霄歌。
(二四b九)	賢哉對帝賓、役召伯幽車。
	七祖解胞根、世世爲仙家。

『上清大洞眞經』の構成について

(巻二、七b三)

その一方で『真誥』には、同じく「大洞真經」の四字を冠しながら、『上清大洞真經』とは似ても似つかぬ文獻も引用されている。

『大洞真經精景案摩篇』に曰はく、臥より起つに、當に炁を平らかにして正坐すべし。先ず兩手を又し、乃ち度して項の後ろを掩ふ。因りて面を仰ぎて上を視、項を擧げ、項をして兩手と争はしむ。之を爲すこと三四にして止む。人の精をして和せしめ、血をして通ぜしめ、風氣をして入らざらしむ。

(巻九、三b一)

このほか、巻十に引かれる『大洞真經高上内章過邪大祝上法』も、危険な所を通る際に邪を避ける方法を説くものであって、一萬回の讀誦とはおよそ無關係な姿を見させている。

冒頭でも述べたとおり、『大洞真經』が上清經のなかで特別な存在であるという認識が廣まった大きな要因として、『真誥』に『大洞真經』を重視する言葉が見られることが擧げられる。さらに、『真誥』巻五の「道授」と題する經典目録に『大洞真經』の名が見え、それが、「在世」とされるわずか七點の一つであることが、『大洞真經』が他の上清經よりも早い時期に成立していた重要な經典であることを示す證左と考えられてきたのである。しかしながら、「道授」において『大洞真經』が提示されるのは、道の經典として『八素真經』など十數點が列擧され、次いで仙道の經典が擧げられるなかの三番目に過ぎず、突出した地位が與えられているわけではない。また、右に示したとおり、讀誦するために作られたものではない『大洞真經』も存在していたのである。したがって、『真誥』の頃にそれを「至經」と評價する説が存在したのは事實だが、そのことを以て、經典の讀誦による昇仙という主張に沿った内容を持ち、なおかつ『大洞真經三十九章』と呼稱される文獻が實體をもって存在し

ていたと考えるのは早計の譏りを免れない。

『無上祕要』が編まれた時期においても、事情はさほど變わらない。『上清大洞眞經』に見られる要素を『無上祕要』に求めると、前述のとおり、『龜山玄籙』の元となった文献と、「招五星上法」として引かれる文献に行き着くのだが、逆に『無上祕要』において『大洞眞經』からの引用であることが明記される十數例について見ると、そのいずれも『上清大洞眞經』には對應する箇所を見いだすことができない。この頃もやはり、『上清大洞眞經』には繋がらない、複数の『大洞眞經』が存在していたのである。そうしたなか、『大洞眞經』からの引用とされる内容が、道藏所收の別の文献、『上清高聖太上大道君洞眞金元八景玉錄』に見られる例が二例存在する点は興味深い²²⁾が、これについては別の機會に論じた。

結語

上清經の經典群が整備され、『大洞眞經』を最上位に

『上清大洞眞經』の構成について

据える考えが固定化されていくなかで、最上位に位置するに相應しい經典が必要とされるようになったことは想像に難くない。そうした時期に、かつて存在していたものが失われていたのか、あるいははじめから存在していなかったのかは知る由も無いが、新たに經典を作ることと『大洞眞經』を實在させようとする動きがあったのは事實であろう。

そうした試みが、いつ頃、どのように行なわれたかを特定するのは難しいが、『上清大洞眞經』について言うならば、その複雑な要素が現在のような形に構成された時期は、『無上祕要』が編まれた時期より後と考えるのが妥當である。既に指摘したとおり、組み込まれた要素なかには『眞誥』に見られる内容も含まれてはいるが、その分量たるや微々たるものに過ぎず、しかも經の骨格とは言い難い部分に對應するものであるから、この例の存在を以て、昇仙を目指して讀誦されていた内容の痕跡を『上清大洞眞經』の中に認め得るとすることにも躊躇を覚える。

『上清大洞真經』の構成について

『上清大洞真經』は、上清經の所説をできるだけだけ詰め込むことによって權威付けを圖ったわけだが、結局のところ、複雑な内容をもったがために、却って他經よりも後れて成立したことを露呈する結果となっている。そうした權威付けを必要としたという事實こそ、この經を編んだ者たちの周邊に、絶對的な位置に君臨する經典が傳わっていなかったことを物語っていると云えるだろう。

註

(1) 『大洞真經』に關する專論の主なものとして以下の三點を挙げておく。Isabelle Robinet *《Le Ta-Tung Chen-Ching — Son authenticité et sa place dans les textes du Shang-ching ching》* (*《Tantric and Taoist Studies in Honour of R. A. Stein》* Volume Two, Edited by Michel Strickmann (Publié avec l'aide financière du Ministère de l'Éducation Nationale et de la Culture Française, 1983)。麥谷邦夫「大洞真經三十九章」をめぐって(吉川忠夫編『中國古道教史研究』同朋舎出版、一九九二年)。張超然「《大洞真經》的實踐與發展」(『系譜、教法及其整合・東晉南朝道教上清經派的基礎研究』第八章、國立政治大學中國文學系博士

學位論文、二〇〇八年)。

(2) この一段は、『上清大洞真經玉訣音義』において「道經第三十九」に對する注の直後に置かれる。一見、後序のように見えるが、一二b二の「又按『青要紫書金根經』」以下は、卷頭に置かれる叙の一b六以下にほぼ同じ文章が見えており、編集上の混亂があることは明らかである。陳景元とは異なる人物が書き込んだ注記が混入した可能性も考慮すべきであろう。

(3) 本稿において、「上清」の語を冠して『上清大洞真經』と呼稱する場合は、専ら道藏洞真部所收の六卷本を指すこととし、該經については常にこの六字の名で呼稱する。他の文獻については特に斷ることなく、適宜、略稱を使用する。

(4) *《The Taoist Canon: A Historical Companion to the Daozang》* Edited by Kristofer Schipper and Francis Verellen (The University of Chicago Press, 2004) 所收のI・ロブネ氏による『上清大洞真經』の解題を参照。拙稿「『五老寶經』小考」(麥谷邦夫編『三教交涉論叢』、道氣社、二〇〇五年)においても序文と兩經との關係に言及した。

(5) 注(1)所掲張論文は、『上清大洞真經』卷一〈誦經玉訣〉的儀式結構與來源」と題する表に、他の道典との對應關係を精査した結果を示している。なお、卷一のうち、

「大洞滅魔神慧玉清隱書」と題する九十四句から成る韻文とその後に置かれる百二十字ほどの文章については、陳景元が『上清大洞眞經玉訣音義』で注釋の對象としている。

(6) 『雲笈七籤』が「存大洞眞經三十九眞法」と題して卷四十二に収録する文章も、太微小童をはじめとする體內神の存思を説くものである。この文章は、後述する『上清太上玉清隱書滅魔神慧高玄眞經』に基づくと思われるから、まず『高玄眞經』を分析したうえで検討する必要がある。なお、金志珪『大洞眞經』の實修における身體―『雲笈七籤』「釋三十九章經」を踏まえて―(『東方宗教』第一〇七號、二〇〇六年)は、「體內神の存思という側面と共に、天界の存思という側面にも注目して、はじめてその窮極性が理解される」と述べ、〈章〉の部分に説かれる體內神の存思と、〈道經〉の神に關する存思を總合して捉えるべきとする。

(7) 『敦煌道經』圖錄篇三五五頁に畫像がある。目錄篇一七三頁において、大淵氏は、寫本のうち「三十九章の部分」の前に置かれる文章が「類似する文は存しない」ものであることを指摘する。さらに、諸文獻に引用される文を検討した結果として、「南北朝或は初唐頃の大洞眞經」に「偈或は呪の形式によって構成されている三十九章の外に、前段或は前後に地の文その他の存したことは、

：明かである」と指摘し、「本鈔本の中の前文とも稱すべき部分の前半は、三十九章の讀法についての科儀的記述であり、此等全體が唐代(本鈔本の寫成年代は七世紀後半から八世紀初め頃と思われる)の大洞眞經の一部を形成していたものと考えて大過ないであろう」と結論づけている。(『福武書店』目錄篇一九七八年、圖錄篇一九七九年)

(8) 拙稿「上清經の構成について―經典分析の試み」(『東方宗教』第一一三號、二〇〇九年)参照。

(9) 『洞眞高上玉帝大洞雌一玉檢五老寶經』一七b七。なお、『五老寶經』「大道雌一帝君變化雌雄之道」には、『上清大洞眞經』の〈章〉で祈りの對象とされる神々が十四位見られる一方、その枠組みが『上清大洞眞經』とは異なっている。注(4)所掲拙稿参照。

(10) 『神州七轉七變舞天經』に見える十四の〈道章〉のうち、第五章に相當する内容が『無上祕要』卷九十七、一六a九に引かれる。

(11) 砂山稔「『上清變化七十四方經』と『上清經』―『上清衆經諸眞聖祕』と『太平御覽』の引用を軸として―」(『岩手大學人文社會科學部紀要』アルテス・リベラレス」第九十五號、二〇一五年)は、『龜山玄籙』が『道藏闕經目錄』に名が見える『七十四方經』と密接な關係があると指摘する。

『上清大洞真經』の構成について

(12) 諱と字は口訣によって傳えられるということであろう。文字としては示されていない。現行本『龜山玄籙』では、卷上は神の諱と字を明らかにする一方、卷下にはそれに關する記述がない。

(13) 『上清大洞真經』第二十六章の「大洞玉經」と題する韻文に「左有堅玉君」という句が有る。そこに附された小字注には「骨神」とあつて堅玉君を胃の神とする第十八章と齟齬していることも、堅玉君は骨の神であるという認識が定着していたことを示すものであろう。

(14) ペリオ二七五一と密接な關係をもつ文獻に道藏正一部『上清太上帝君九真中經』があり、そこでも、「第一眞法」から「第九眞法」まで、同様の記述を繰り返して、神々が修行者の身體各部に宿る様子を存思することを説く。その存想法では、例えば、「第一眞法」に「天精君の坐して心中に在るを存す」とあるように、敦煌本と同様、神の所在を直接的に述べているが、「第二眞法」のみ敦煌本とは大きく異なり、「堅玉君、字凝羽珠の入りて喉下胃管の中に坐し、白氣に化して以て諸百骨節の中に入るを存す」と、神が胃を経由することを述べている。詳しくは、注八所掲拙稿参照。

(15) 三十九の〈道經〉を通覽すると、㉔㉕の位置に祝文が二篇置かれるものと、一篇のみのものが混在している。そのほとんどの題には「玉清」の語を含む神號が冠され

ており、「高上神霄玉清王祝」と題するものが最も多い。一方で、「玉清」の語を含まない「上清紫元王」という神號も見られる。

(16) 『無上祕要』卷四十二に出づるものとして引かれる一段には、「大洞玉清隱祝は九天の上文、出づること高上の口訣自りす。滯を解き怨を散じ、『大洞真經三十九章』の理は此に極まる。」(二六a九)と述べられており、『大洞真經三十九章』に「大洞玉清隱祝」を結びつけようとする意圖が見て取れる。なお、この一節は現行の『無上祕要』では『洞真玉清隱書經』を出典として、卷四十三に見える(一四b六)。

(17) 浦山あゆみ「陳景元の音注―『南華真經章句音義』と『上清大洞真經玉訣音義』について―」(『大谷大學研究年報』第六十集、二〇〇八年)は、陳景元が『玉訣音義』を著したのは、彼が茅山に歸つた一〇八三年から没した一〇九四年の間だと推定している。

(18) 注(6)所掲金論文は、陳景元が『玉訣音義』に引く『道君玉注』と「釋三十九章經」との間に共通點が見られることなどを根據として、「釋三十九章經」は、六世紀前半には成立していた『道君玉注』から抜き書きして作られたと推定する。しかし、陳景元が引くのはわずかに十一例に過ぎず、「釋三十九章經」とは表現等が異なる箇所もある。『玉訣音義』と「釋三十九章經」がともに

『道君玉注』を参照したのは事實であろうが、陳景元はその出處を明示したのに對し、「釋三十九章經」の著者はそれを明示せずに引用したのであって、「釋三十九章經」には後世の情報も含まれていると考えるべきであろう。

(19) 注(12)参照。

(20) 「天上内音」が、『大洞眞經』に關連する經典や類書を除けば、他の文獻にほとんど見られないことも後出の傍證となろう。「天上内音」については、『上清高上金玄羽章玉清隱書經』『玉清消魔大王金玄百神内呪隱文』にその略稱らしき言葉や、類似する言葉遣いが見える。『大洞眞經』と『玉清隱書』との關係を考えるなかで再考すべき問題である。

(21) 『洞眞太一帝君太丹隱書洞眞玄經』にも『大洞眞經中篇』(一—a二)という書名が見え、そこに引かれる六字八句、計四十八字の韻文が、『上清大洞眞經』『晨中皇景元君道經第二十九』の「高上消魔玉清王祝」の一部と一致する。

(22) このことを最初に指摘したのは、John Lagerwey 《*Wu-shang Pi-yao*》(École Française d'Extrême-Orient, 1981)であろう。なお、道藏本は『八景玉籙』に作るが、内容から見て「玉籙」とするのが妥當であろう。注(1)所掲ロビネ論文も『八景玉籙』に注目している。

『上清大洞眞經』の構成について

『上清大洞真經』の構成について

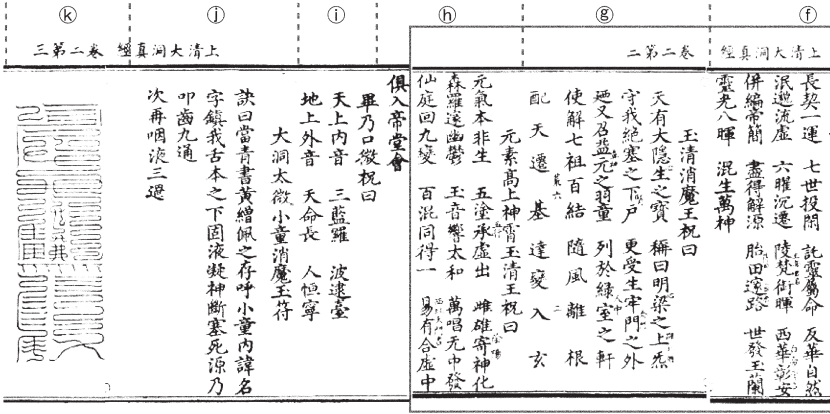
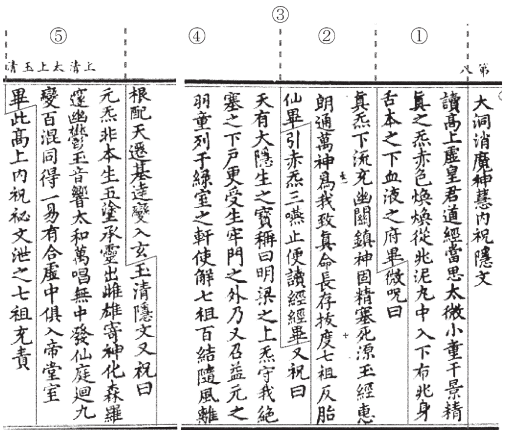


圖 2



四〇

表1

A 『上清大洞真經』 〈道經〉に見える神號		B 『神州七轉七變舞天經』 〈道章〉の呼稱	
01 高上虛皇君	高上元始玉皇道章第一	01 北玄高上虛皇君	D 『上清元始變化寶真上經九靈 太妙龜山玄籙』卷下 に見える神號
02 上皇玉虛君	九天太真道章第二	2 南朱高上虛皇君	
03 上上玉帝君	上皇玉虛君道章第三	3 西華高上虛皇君	
04 上皇先生紫晨君	太上玉帝道章第四	4 東明高上虛皇君	
05 太微天帝君	太上大道君〈道〉章第五	5 中元中含虛皇君	
06 三元紫精君	三元紫精君道章第六	6 五靈七明混生高上君	
07 眞陽元老玄一君	眞陽元老玄一君道章第七	7 三元无上玄老虛皇元辰君	
08 上元太素三元君	青靈陽安君道章第八	8 玄寂九元上虛皇君	
09 上清紫精三素君	皇清洞眞君道章第九	9 大明靈輝中眞无上君	
10 青靈陽安元君	皇初紫元君道章第十	10 三元四極玄上虛皇元靈君	
11 皇清洞眞道君	无英中眞上老君道章第十一	11 三元農中黃景虛皇元臺君	
12 高上太素君	中央黃老君道章第十二	12 三元紫映暉神虛生注眞元胎君	
13 皇上四老道中君	高上太素君道章第十三	13 青精上眞内景君	
14 玉農太上大道君	太陽君道章第十四	14 太陽九氣玉賢元君	
15 太清大道君		15 太初九素金華景元君	
16 太極大道元景君		16 九皇上眞司命君	
17 皇初紫靈元君		17 天皇上眞玉華三元君	
18 無英中眞上老君		18 太上元禁君	
19 中央黃老君		19 元虛黃房眞晨君	
20 青精上眞内景君		20 太極主四眞人元君	
21 太初九炁玉賢元君		21 四斗中眞七農散華君	
22 太初九素金華景元君		22 農中黃景元君	
23 九皇上眞司命道君		23 金闕後聖太平李眞天帝上景君	
24 太皇上眞玉華三元君			
25 太上元禁君			
26 元虛黃房眞晨君			
27 太極主四眞人元君			
28 四斗中眞七農散華君			
29 農中黃景元君			
30 金闕後聖太平李眞天帝上景君			

C 『無上祕要』卷二に見える
神號と居處

『上清大洞真經』の構成について

『上清大洞真經』の構成について

表2 『上清元始變化寶真上經九靈太妙龜山玄籙』卷上に見える神號
ゴシック體の數字は『上清大洞真經』の《道經》

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
上皇玉虛君	紫虛高上元皇道君	高上虛皇君	上靈紫映九霄眞王	高上玉寶九霄丈人	虛上三天玉童	虛老三天主人	道極九天玄母	道根九天元父	玉眞九天丈人	高靈九天王	元始皇上丈人
2	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
眞陽九老玄一君	紫虛三元紫精元君	紫虛玉皇先生紫農君	虛明紫蘭中元高嶂君	太素高虛上極紫皇君	皇上玉帝	玄虛太眞洞景君	紫虛皇老上帝君	紫虛皇上帝君	上皇先生紫農君	皇三元太明上皇君	皇上一萬始先生
7	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27
无英中眞上老君	皇初紫元君	太清大道君	太極大道元景君	中央黃老君	玉晨太上大道君	皇太上四老道中君	皇清洞眞君	上清紫精三素君	高上大素君	上元太素三元君	青靈陽安君
18	17	15	16	19	14	13	11	9	12	8	10
5	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
太微大帝君	太極大帝君	太清大帝君	太極大帝元景君	中央黃老君	玉晨太上大道君	皇太上四老道中君	皇清洞眞君	上清紫精三素君	高上大素君	上元太素三元君	青靈陽安君

39	38	37	36	35	34	33	32	31
九靈眞仙母青金丹皇君	太元農中君蛾眉洞室玉戸太素君	玄洲二十九眞伯上帝司禁君	小有玉眞萬華先生主圖玉君	扶桑大帝九老仙皇君	東華方諸宮高農師玉保王青童君	洞清八景九老老君	太玄都九炁丈人主仙君	太虛後聖元景影室眞君
龜山九靈眞仙母	太元農中君	玄洲二十七眞伯上帝司禁君	小有玉眞萬華先生主圖玉君	扶桑大帝九老仙皇君	高農師王青童君	上清八景老君	太玄都九炁丈人主仙君	太虛後聖无影影室眞君
寶素宮 九玄府	玄洞宮 太生府	司空宮 仙都府	金靈宮 通氣府	清元宮 賜谷府	方諸宮 青元府	清虛宮 洞清府	太玄宮 玉堂府	无量宮 玄闕府
37	36	35	34	33	32	31	30	29
中央總靈高皇黃帝君	北方通陰太陽黑帝君	西方少陰西金白帝君	南方通陽納陰赤帝君	東方上始少陽青帝君	龜山九靈眞仙母	玄州二十九眞伯上帝司禁君	小有玉眞萬華先生主圖玉君	扶桑大帝九老仙皇君
24	25	26	27	28	29	30	31	32
太虛後聖無景影室眞君	太玄都九炁丈人主仙君	上清八景老君	東華方諸宮高農師玉保王青童君	扶桑大帝九老仙皇君	小有玉眞萬華先生主圖玉君	玄州二十九眞伯上帝司禁君	太元農中君	龜山九靈眞仙母

表3

A『上清大洞真經』		B『上清元始變化寶真上經九靈大妙龜山玄籙』	
章題	部位	部位	神號
1 太微小童章	舌本之下血液之府	上元血液之府	高上虛皇君
2 大帝尊神章	玉枕之下泥丸後戶	泥丸後門之中	上皇玉虛君
3 玉帝尊神章	兩眉中間紫戶外宮	肝之上門	上皇先生紫晨君
4 左無英公子章	左腋之下肝之後戶	右腋之下	太微大帝君
5 右白元尊神章	右腋之下肺之後戶	命門之外	眞陽九老玄一君
6 中央司命丈人君章	絳宮心房之中血孔之戶	命門之內宮	紫微三元紫精元君
7 命門桃君章	膻中之關命門內宮	九孔之戶	上元太素三元君
8 泥丸上一赤子章	泥丸九孔之戶	大髓骨首之戶	上清紫精三素君
9 絳宮中一元子章	項中大椎骨首之戶	兩丸之開車軸下戶	青靈陽安君
10 命門下一黃庭元王章	兩腕之開車軸之戶	口之四際中	高上清洞眞君
11 泥丸九眞章	口之四際	背脊骨節之府	皇清太素君
12 膽中八眞章	背脊骨之下節	背脊骨地戶	皇上一四老道中君
13 七眞玄陽君章	背之窮骨九地之戶	喉外十二間梁之府	玉晨太上大道君
14 眞中六眞章	頸外十二間梁	喉內極根之府	太極大道元景君
15 脾中五眞章	胃腕之戶膏膜之下	胃管之戶高膜之中	皇初紫元君
16 肝中四眞章	鼻兩孔之下源	泥丸鼻兩孔下源之中	无英中眞上老君
17 精血三眞章	太倉之膈五腸之口	胸中四極中	中央黃老君
18 胃腕二眞章	胸中四極之口	左耳伏農之戶	青精上眞內景君
19 心中一眞章	左耳之下伏農之戶	右耳伏農之戶	太陽九氣玉賢元君
20 九元之眞章	右耳之下伏農之戶	頭面之境	太初九素金華景元君
21 紫素左元君章	頭面之境	胸腹之境	九皇眞司命君
22 黃素中元君章	胸腹之境	下關少腹至脚	天皇眞玉華三元君
23 白素右元君章	下關之境	左手之戶	太一上元禁君
24 日中司命章	右手通眞之戶	左目中	元虛黃房眞晨君
25 月中桃君章	左手通眞之戶	右目中	太極玉四眞人元君
26 左目童子章	右目	肺部華蓋之門	四斗中眞七晨散華君
27 右目童子章	右目	五藏結喉之本	晨中黃景元君
28 胎中白炁君章	五藏之上結喉本戶	五藏大胃上口	金闕後聖太平李眞天帝上景君
29 胎中青炁君章	五藏之下大胃上口	九腸之口伏頤之下	太虛後聖無景彭室眞君
30 胎中黑炁君章	九腸之內二孔之本戶	少腹二孔之本	太玄都九炁丈人主仙君
31 胎中黃炁君章	百關之穴絕節之下	本命之根胞胎大浩中	上清八景老君
32 胎中赤炁君章	本命之根胞胎大結	鼻下人中	東華方諸宮高晨師玉保王青童君
33 上玄元父章	陰莖之端ほか計6箇所	鼻下人中	扶桑大帝九老仙皇君
34 二素老君章	鼻下人中	陰莖之端	小有玉眞萬華先生主闡玉君
35 五帝章	陰莖之端ほか計6箇所	丹田宮本命帝室	玄州二九眞伯上帝司禁君
36 帝脚章	明堂中	龜山九靈眞仙母	太元晨中君
37 帝一尊君章			太元晨中君
38 帝一尊君章			太元晨中君
39 帝一尊君章			太元晨中君

☆印は、一章に複数の神を祈りの対象とするもの

表 4

方盈	接生君	啓明蕭刃	圓華黃刃	翳鬱無刃	上歸	拘制	天精液君	堅玉君	元生君	青明君	養光君	上元素玉君	玄陽君	合景君	帝昌上皇	始明精	神運珠	玄凝天	孩道康	理明初	鬱靈標	玄充叔	絳凌梵	務猷收	干景精	神名
運梁	道靈	金門上	太張上	安來上	帝子	三陽	飛生上英	凝羽珠	黃寧子玄	明輪童子	太昌子	梁南中童	冥光生	北臺玄精	先靈元宗	元陽昌	子南丹	三元先	合精延	玄度卿	玄夷絕	合符子	履昌靈	歸會昌	會元子	神字
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	章

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	5	4	3	2	1
月中桃君	日中司命君	白素右元君	黃素中元君	紫素左元君	皇一之魂女	九元之眞男	心中一眞	骨節二眞	精血三眞	脾中五眞	腎中七眞	肺中六眞	絳宮中一元丹皇君	肝中四眞
方盈	接生	啓明蕭刃	圓華黃刃	翳鬱無刃	上歸	拘制	天精液君	堅玉君	元生君	養光君	玄陽君	上元素玉君	神運珠	清明君
		金門上	太張上	安來上	帝子	三陽	飛生上英	凝羽珠	黃寧子	太昌子	冥光生	梁南中童	子南丹	明輪童子
右手	左手	下關之境	胸腹之境	頭面之境	右耳伏羲之戶	左耳伏羲之戶	胸中四極之口	太倉之府五腸之口	兩孔之下源	脾中極根之戶	兩腎中背骨地府	肺中十二關門	絳宮中頭骨首之戶	肝中胃管之戶膏膜之下

『上清大洞眞經』の構成について

